

主体的に取り組む体験活動を通した豊かな心の育成  
家庭・地域に広める体験活動

富山県黒部市立若栗小学校

1 地域、学校の特徴

- (1) 若栗地区は黒部川扇状地の豊富な水を生かし、米づくりや野菜づくり、果樹栽培が行われる農業地域である。近年、新興住宅団地の造成が進み他地域からの転入が増え、家族構成や価値観が多様化してきている。
- (2) 本校は全校児童137名、全学年単級の小規模校である。保護者や地域の教育への関心は高く、学校の教育活動に対しても協力的である。地域人材の積極的な協力を受け、地域の自然と文化を生かした体験学習を積極的に取り入れた教育活動を実施している。

2 児童の実態と本事業導入の趣旨

本校の児童は穏和で素直であり、助け合ってよく働くなど落ち着いた生活態度である。その上に、自ら問題に気づき積極的に取り組む態度や、自分の思いを進んで表現する力を育成することが課題ととらえている。一方、最近の家庭の様子を見ると、親子で一緒に仕事をしたり共通の話題で話し合ったりすることが少なくなっているようである。また、自宅で作物を栽培している家庭でも、食べ物のおお切さや育て方について話すこともなくなっているように思われる。

そこで、今一度地域を見直し、地域の特長を生かした体験活動を通して、「なぜだろう」という疑問を育み、その疑問の解決に向けて自ら学ぶ楽しさに気づかせたいと考えた。また、栽培活動、飼育体験、陶芸制作等の多様な体験を通して、「もののありがたさ」や「作り出すことの喜び」を実感し、豊かな心と実践力を育みたいと考えた。

さらに、学校週五日制の完全実施に伴い、学校での学習や体験活動を家庭へと発展させることが大切と考えた。そこで、学校での栽培の経験を生かして、各家庭でも児童が保護者や祖父母等と一緒に栽培活動に取り組むようにした。この活動は児童に実践力を育むことをねらうとともに、学校と家庭・地域との連携を深め、その教育力の向上を図ることも目指すものである。

以上のことより、本校では本事業を全学年の教育課程に位置づけ、全教職員の共通理解のもと実施することとした。

3 体験活動のねらい

地域の特長を生かした栽培活動、飼育体験、陶芸制作などの多様な体験活動の場を設定し、子供の自主性や主体性を大切にしたい体験活動を進めることにより豊かな心と実践力を育む。また、学校と家庭・地域との連携を深める。

4 教育課程への位置付け

本校では、総合的な学習の時間と生活科の学校テーマを関連づけて「ふるさと『若栗』」と設定し、総合的な学習の時間の目標は「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、よりよく生きる子供の育成」としている。本事業の体験活動は主に総合的な学習の時間や生活科に位置づけ、特別活動や各教科等とも関連を図りながら行ってきた。

体験活動の内容と教育課程への位置付け

学年	本事業に関連する主な体験活動	教育課程への位置付け
1年	栽培活動（一鉢栽培、畑作） 朝顔、なす、トマト、ミニトマト、とうもろこし	生活、特別活動、算数
2年	ウサギの飼育活動 栽培活動（畑作） さつまいも、じゃがいも、なす、ミニトマト、とうもろこし	生活、特別活動、算数
3年	栽培活動（畑作） へちま、瓢箪、きゅうり、トマト、なす、ミニトマト、とうもろこし	総合的な学習の時間、特別活動、理科、算数、社会
4年	にわたりの飼育活動 栽培活動（畑作） じゃがいも、さつまいも、大根、なす、ミニトマト、とうもろこし	総合的な学習の時間、特別活動、算数、理科、社会
5年	栽培活動（花壇、稲作、畑作） 花、稲、大豆、すいか、メロン、なす、ミニトマト 陶芸制作	総合的な学習の時間、特別活動、理科、算数、社会
6年	栽培活動（花壇、稲作、畑作） 花、稲、かぼちゃ、すいか、なす、ミニトマト、とうもろこし 陶芸制作	総合的な学習の時間、特別活動、社会、理科、算数
全学年	栽培活動（一坪菜園、一袋栽培、一鉢栽培） なす、ミニトマト、とうもろこし、チューリップ、各種花	（家庭・地域での実践）

## 5 活動の概要

### (1) 実践例

#### 稲作体験（5、6年）

米作りの盛んな地域にもかかわらず、子供たちの家庭での勤労体験が減少していることから、地域の篤農家や農協の協力を得て稲作体験を行っている。5アールの学校田で、5、6年生がハナエチゼンを栽培した。田の枠転がし、田植え、苗の生長を観察しながらの水の管理、施肥、稲刈りと、米作りの全過程についての体験活動に取り組んだ。

#### 畑作体験(全学年)

自分たちで選んだ作物と全学年共通の作物を栽培した。選択させたのは、子供の主体性を大切にしたいとの考えからである。全学年が共通して育てる作物としては「なす」と「ミニトマト」を選んだ。「なすには無駄花がない」と言われるくらい栽培には失敗が少ない。また、本当に無駄花がないかという疑問にもつながるとの考えからである。ミニトマトも割合育てやすい。また、苗が全く同じように見えても育ててみると違った花を付け実を結ぶことから、感動したり疑問をもったりして学習が発展することを期待した。

実際に、生長するにつれて、全く同じミニトマトと思っていたものから、赤の実を結ぶもの、黄色の実を結ぶもの、形も丸いもの、長細いものと様々なミニトマトを目にして子供たちは大変驚いた。

#### ウサギの飼育体験（2学年）

生活科の授業でウサギを観察したりふれあったりする活動の後に、3年生からウサギの世話の仕方を教えてもらうという場面を設定した。子供同士のかかわりの中から学んだことを生かし、子供たちは日々の飼育体験に取り組んでいる。毎日世話をすることからウサギに愛着を感じ、子供もウサギをかわいがり、ウサギも子供たちの姿を見ると大変喜ぶ。そのため生活科の他の単元の学習や日々の係活動でも、子供たちはウサギとかかわり、感動したことや気づいたことなどをデジタルカメラで撮り、学級で生き生きと紹介している。

#### にわたりの飼育体験（4学年）

総合的な学習の時間と関連付けながら、日常の世話は当番制で行っている。授業では若

鳥の成長の様子を紹介したり、世話について気をつけなければならないことを話し合ったりしている。休みの日や冬の積雪時も世話をしなければならない。特に積雪時は、雪をかき分けてのつらい作業であるが、保護者の協力も得ながら責任をもってやり遂げている。

#### 陶芸制作体験（５・６年）

校区の陶芸家の協力を得て、「手びねり作業」、「絵付け作業」の２回に分けて実施した。講師には一人一人のイメージや願いを大切にされた熱心なご指導をいただいた。手びねりで成形した作品に絵付けをして完成させ、できあがった作品は、公民館祭りに展示し、地域の方々に鑑賞していただいた。

#### (2) 家庭・地域に広める実践

学校での栽培活動の発展として各家庭での「一坪菜園」、「一袋栽培」、「鉢栽培」を実践した。様々な家庭があることに配慮して方法を一つに絞らず、いくつかのやり方を提示して選んでもらうようにした。畑がある家庭では一坪菜園として、子供が畑の一部を受け持ち、自分で責任をもって作物を育てた。畑のない家庭では肥料袋を用いた一袋栽培や鉢栽培を実践してもらった。



学校だよりや保護者向け案内で、家庭での栽培活動の趣旨について理解と協力を得るように努めるとともに、植え方や育て方についても具体的に知らせた。

#### 春から夏の実践

最初の作物は、学校で栽培したなす、ミニトマトとトウモロコシとした。ミニトマトは兄弟でも違った実を結び、「同じミニトマトなのになぜ、違うの」など疑問をもち、ミニトマトもいろいろ違った種類があることが初めて分かった子供もいた。学校での栽培活動では他人任せになりがちな子供も、一坪菜園では自覚を持って世話や観察を続けた。「観察に勝る研究はない」といわれるが、観察から子供たちはそれぞれに発見があったようである。

#### 【保護者の感想】

子供が、ミニトマトを育ててみたいというので育ててみました。正直いって、畑のことは、全く素人で無関心な私でしたが、子供にひかれ、一緒に観察しました。

みんな同じミニトマトだろうと思っていましたが、生長し実が大きくなるにつれて「丸い形の実」と「ひょうたん形の実」がなってきました。「なんて不思議なんだろう」同じミニトマトの苗だったのに。

ミニトマトを育てるのに「わき芽」を摘んだり、倒れていかないように気をつけたりしました。植えてから雨が続き実がなるのか、大変心配しました。最初、赤い実がなった時、子供と喜び合いました。夏休みに入って、暑い日ばかり続くので、朝、一日おきぐらいに、二人で水をやりました。お盆前には、あわせて50個ほどとりましたが、まだ青い実がたくさんなっています。

スーパーに行くと、子供は、「ミニトマトあるよ。私たちの植えたトマトの方が、新鮮でおいしいよね」と関心も出てきました。子供のころから作物を世話して育てる経験をするのは大事なことだと思います。この体験を生かして、これからも子供と一緒にミニトマトを育てようと思っています。

#### 秋から冬の実践

秋植えの作物としてチューリップとアネモネ、花の種を選んだ。いろいろな種類のものを取りまぜ、全校で抽選会をして配布した。「どんな花の種が当たるのか」「チューリップはどんな花をつけるか」など、子供たちがワクワクした気持ちで取り組めるようにしたいとの考えからである。集会で球根の植え方について話し合った。「まっすぐ植えたり、逆さに植えたり、横に植えたりすると芽の出方はどうなるか」「芽の出方は、地球の引力と関係がある

のか」などの話し合いにより、継続的な観察がなされることを期待している。

## 6 その他の工夫点、配慮事項

- ・ 栽培活動は水やりや除草という日常活動を伴う。水道の配管を延長し水やりの負担を軽減するなど、継続しやすい学習環境の整備に努めた。また、収穫物を用いたパーティー等を学年ごとに実施し、活動の満足感を味わえるように配慮した。
- ・ 飼育体験では授業と日常の活動を関連付け、意欲的に日常活動ができるように配慮した。
- ・ 学校の正面玄関に掲示板を設置し、子供の活動の様子や成果を掲示し、訪問者に学校への理解を深めていただいている。また、掲示は子供たちの活動への励みともなっている。

## 7 推進体制

校内の推進体制を整えるとともに、振興会長、公民館長等、地区の有識者7名と教員4名による「学校支援委員会」を設立し、効果的な推進の在り方について協議した。また、具体的活動の中で多大な指導・支援をいただいている。

また、家庭での栽培活動を実施するために、PTA役員への理解と協力を依頼した。さらに、学校だより（全戸配布）や保護者向け案内で協力を呼びかけた。また、体験活動の成果について、学校だよりで積極的に取り上げるようにしている。

## 8 成果

### (1) 教育課程内の実践

- ・ 稲作体験や畑作体験を通して、勤労の尊さや喜びを実感するとともに、協力することの大切さを学ぶことができた。
- ・ 飼育体験を通して、命あるものを大切に生き物を慈しむ豊かな心を育むことができた。また、責任感を育むことができた。
- ・ 栽培活動や陶芸制作体験を通して、ものを大切にする心が育ってきた。また、作った人の苦勞が分かるようになってきた。

### (2) 家庭・地域に広める実践

- ・ 苗や種の配布が継続的なふれあいの機会を提供し、親子のふれあいを深めることができた。また、これまで一方通行になりがちだった学校からの通信に対し、家庭からの反応が返ってくるようになり、学校と家庭の連携を深めることができた。
- ・ 祖父母の知恵や経験に助けられることが多く、子供や保護者はお年寄りのすばらしさを実感できた。
- ・ 家庭や地域でも栽培活動が話題にあがるようになった。学校からの発信が「話の種」となり、地域の中へと浸透し、学校理解につながった。

## 9 今後の課題

- ・ 学校週五日制となり、家庭で過ごす時間の利用の仕方が重要となっている。一坪菜園の活動を体験だけに終わらせるのではなく、自ら課題をもち、継続的に追究する活動にできるよう、さらに工夫が必要である。
- ・ 生産に携わっている人たちの工夫や苦勞を具体的にとらえ、自分なりの考えや思いを深めるためには、体験活動だけでは不十分である。今後は体験を道徳の時間に結びつけるなど、体験を深める方策を検討していきたい。